

「じゃあ、自分からお尻叩かれる体勢になって」

ぽんぽんと太ももを叩く玲央。

「お尻叩かれるエッチな動画見てる千紗ならどうすればいいかわかるだろ？」

「……………っ……………」

む、り……………！

いざ、そういう雰囲気になると、体が硬直して、思うように動けない……。

「体ガチガチになっちゃったな、緊張してる？」

「緊張っていうか……玲央にお尻叩かれるとか……………恥ずかしすぎて……」

「まあ、そうだよなあ……………じゃあ、千紗が自分を曝け出せるようになるまでは俺が指示するか」

大きな手で背中を撫でられて、そのまま敏感な腰をすりすりとお撫でられる。

普段は優しく触れてくれる大きな手が、今日は私を叱るために動いている。いつもと違う空気にドキドキする。

「ここにうつ伏せになって」

グッと手首を引つ張られて、玲央の太ももへうつ伏せに寝ころばされる。大きな手でお尻を撫でられ、もう叩かれるのかと体に入力を入れて構える。

「千紗、お尻叩かれるの初めて？」

「……………うん……………」

「じゃあ、20回くらいにしとくか。叩かれたら自分で回数数えて、間違えたらやり直し。回数数えた後、ごめんなさいっていうこと、わかった？」

「……………わかった……………」

「千紗が、どんなに恥ずかしい姿を晒しても嫌いになつたりしないから、安心して全部曝け出してね」

「う……………うん……………」

ポンポンとお尻を叩かれる。

どうして、私は大好きな彼氏の膝の上で、こんな恥ずかしいお仕置きを受けることになってしまったのだろう。

始まりは、ほんの数時間前――。

★★★

玲央から夕食の約束を延期したいと連絡が来たのは、待ち合わせの2時間前だった。

『悪い。急にクライアントと会うことになった。埋め合わせは絶対する』

続けて、両手を合わせて謝っている犬のスタンプが送られてくる。

『終わったら電話していい？』

玲央は、私からの連絡を無視したことがない。

仕事中で電話に出られないときも、『今、打ち合わせ中。21時には終わる』と必ずメッセージを返してくれる。

だから今日も、『分かった。仕事頑張ってね』と返信した。

それだけで済むはずだった。

けれど……………。

自炊する気になれず、行きつけの定食屋さんでご飯を済ませた後、駅前のホテルに併設されたラウンジの前で、見慣れた後ろ姿を見つけてしまった。

黒いジャケットに、さらりと着崩した白いシャツ。

あ、玲央だ……………！

ちようどお仕事終わったところかな？と駆け寄って声をかけようとした瞬間、玲央の隣に私よりも背が高く、長い髪を艶やかに巻いた女性がいることに気づく。

彼女が何かを囁くと、玲央が楽しそうに笑う。

「クライアントって……………女の人だったんだ」

美容やアパレルブランドを扱うCMO会社を経営している玲央には、華やかな女性の知り合いが多い。

モデル、スタイリスト、インフルエンサー。

玲央自身も元モデルだから、どんな美女と並んでも絵になる。

それに対して私は、食品会社で営業事務をしている、ごく普通の会社員……。隣の女性は誰なのか、聞けばいい。

玲央ならいつものように、ちゃんと答えてくれる。

分かっているのに、スマホを握ったまま動けなかった。

本当は仕事じゃないのかもしれない……。

それに、もし、連絡したことで邪魔者のように思われたら……。

そんな不安に負けた私は、2人のあとをコソコソと追いかけてしまった。

「ば、バレてないよね……………」

2人が入っていったのは、細い路地の先にある会員制のバーのようだった。

繁華街の表通りから1本外れただけなのに、周りの雰囲気はガラリと変わる。看板のない店が並び、路肩には黒塗りの車が何台も停まっていた。

「裏路地、あんまり入っちゃダメって玲央に言われてるんだって……………」

流石の中に入っていく勇氣はない。

「……………はぁ……………帰ろう」

玲央のことだもん、あれはただの仕事相手だ……………。

「つていうか、早く元の道に戻らないと……………」

そう思ったときには、遅かった。

「お姉さん、1人？」

背後から声をかけられ、肩が跳ねた。

振り返ると、酒に酔った男が2人立っていた。

「ち、違います」

「えー、でも、近くに誰もいないじゃん」

「……もう帰るところなので」

彼らの横を通り抜けようと、足を踏み出した瞬間、腕をつかまれる。

「待ってよー。送ってってあげる」

「腕細っ……こんなじゃ、すぐ俺らみたいな悪い男に連れ去られちゃうよー？」

「は、離してくださいっ………!!」

「そんな警戒しないでよー」

口調は明るいけど、腕を掴んでいる手の力は強い……。

怖い…………。

ど、どうしよう……………早く玲央に連絡しなきゃ……………！
バッグへ手を伸ばしたところで、冷たい声が飛んできた。

「その手、離してもらえます？」

聞き慣れた声なのに、普段とはまるで違う。

冷たくて、背筋がピッと正されるような…………。

声の方へ視線を移すと、冷たい表情をした玲央が立っていた。
ゆっくり近づいてくると、私の腕をつかんでいた手を外させ、自分の背中へ隠す。

「こいつ、俺の連れなんです」

「あ？そっちから声かけてきたんだけど」

「へえ。ほんとか？」

玲央が私の方を向く。

「千紗、この人たちに声かけたのか？」

何度も首を横に振ると、玲央が男たちへ向き直った。

「だそうですけど」

睨みつけられても、玲央は怯まない。

身長も玲央の方が大きくて、向こうの方がタジタジになり始めている。

「この辺、防犯カメラが多いんですよ。ここで面倒起こして困るの、そっちじゃないですか？」

静かな口調だった。

それでも逆らわせない迫力があつた。

男たちは舌打ちをしながら去っていく。

姿が見えなくなった途端、私の全身から力が抜けた。

「れ、玲央……ご、め……………」

「……車、こっち」

私を見ようともせず、手首をつかんで歩き出す玲央。

怒っている……………」

いつものように私を助手席へ乗せると、運転席へ回る。

無言……………」

重い空気のまま車が動き出す。

運転はいつもどおり丁寧なのに、ハンドルを握る手には力が入っているように見えた。

「……あの女の人……………」

「仕事相手。新しく契約するブランドのクリエイティブディレクター」

「2人でバーに入っていたから……………」

「あそこで業界関係者の集まりがあったんだよ」

「そう、なんだ」

「他に聞きたいことは？」

「……ない」

「じゃあ、俺の部屋に着いてから話そっか」

ほんの少しだけ口調が柔らかくなって、ホッとする。

★★★

マンションのエレベーター内も無言だった。

本当に怒ってる……。

家に入ると早々、玲央はジャケットを脱ぎ、腕時計を外す。

動作はいつもと変わらないのに、空気だけが張りつめている。

「千紗」

「……………」

「ここに座って」

ベッドを指さされ、私はおとなしく腰を下ろした。

玲央が、私の目の前で屈んで目線を合わせてくれる。

「俺たちが付き合い始めたとき、約束したこと覚えてる？」

「うん」

「なんだっけ？」

「危ない場所に……1人で行かない……」

「他には？」

「不安なことがあったら、1人で考え込まないですぐ玲央に聞く……」

「もう1つ」

「何かあったら、すぐ玲央に電話する……」

「今日、いくつ守れた？」

何も答えられなかった。

「俺が何に怒ってるか、わかる？」

「尾行したこと……」

「尾行は千紗が不安になってしちゃったことだろうから怒ってない。俺が怒ってるのは、千紗が自分から危ない場所へ入っていったこと。大通りから離れると危ない店多いからダメって言っただろ？」

じっと目を見つめられる。

「今日、俺が気づかなかったらどうなった？」

「……わかん………ない……」

目線を下に落とす。

「分からないじゃないだろ」

顎をつかまれ、伏せていた顔を上げさせられる。

「怒られてる時下向くの、千紗の悪い癖だな」

「……ごめんなさい……」

「真面目な話してるんだから、ちゃんと俺の目見て」

「……はい……」

「不安になった時、なんですぐ俺に電話しなかった？」

「……玲央のお仕事の邪魔したくなくて……」

「俺が仕事だとか気にしないでかけてきていいって言ってただろ？千紗からの電話を、俺が邪魔だって言ったことあるか？」

「ない……」

「出られないとき、何も返さず放っておいたことは？」

「……ない」

「じゃあ、勝手に邪魔とか決めつけないの」

低い声で叱られ、胸の奥がきゅっと縮む。

こんな時にこんなこと考えちゃダメってわかってるんだけど、いつも優しくて、甘やかしてくれるから、怒ってる玲央新鮮でかっこいい……………。

「千紗。ちゃんと聞いてないだろ？」

「……………き、聞いている……………！」

「はあ……………俺が毎回すぐ連絡を返してるのは、千紗を安心させたいからだよ。肝心なときに頼ってくれないなら意味ないだろ」

「ごめん……………なさい……………」

「まあ、仕事相手が女性だって先に言わなかった俺も悪いな。千紗が気にするってわかってたのに、配慮できてなかった。そこは謝る」

「玲央は悪くないよ……………！」

少し食い気味で否定する。

「それを決めるのは俺。悪かった。ごめん」

叱るだけではなく、自分の落ち度も認めてくれる。
そんな玲央だからこそ、今日の自分が情けなかった。

「今度からちゃんと約束守る……」

「本当に？」

「うん」

「本当かなあ……？さつきちゃんと俺の話きいてなかったみたいだけど」

「ほ、本当……！」

うんうんと強くなずくと、玲央が困ったように笑った。

「じゃあ、今日はちゃんと反省してもらうか」

「反省……？」

「反省と言ったらお仕置きだよな」

さりと告げられた言葉に、体が勝手に反応した。

肩が震え、呼吸が止まる。

お、お仕置きっ……………。

このワードに強く反応してしまう。

なぜなら……夜、1人になると、女性がお尻を叩かれる動画を見ながら、玲央に同じように叱られ、痛いくらいに叩かれる自分を想像して体を慰めることさえあるくらいのだからだ……。

けれど、そんな性癖を知られたら引かれてしまうと思い、玲央にはずっと隠していた。

「なに、その顔」

「べ、別に……」

玲央の親指が、私の唇をなぞる。

「お仕置きって言われて、何想像した？」

ニヤリと口角をあげる玲央。

「な、何も……！お、お菓子禁止とかされちゃうのかなって思っただけ……！！」

「へえ……嘘つきだなあ、千紗」

「……嘘つき……！！？」

玲央が隣に座り、私の腰を抱いて隣へ引き寄せる。

「お仕置きして聞いて、エッチなこと想像しただろ？」

「……は、あ……！！？そんなわけないし……！！」

「前にここで千紗、寝落ちしただろ？通知、見ちゃったんだよな」

「……………通知？」

「そ、電子書籍アプリの。『年上彼氏からのお仕置き』がどうか」

記憶がよみがえり、顔が一気に熱くなった。

「あ、あれは……！！」

「まあ、中までは見てないけどな。画面に出たタイトルが見えただけ」

玲央の指が、私の髪をゆっくり梳く。

「それだけじゃない。エッチの時、俺がちょっと強い口調になると、呼吸止めて、目とろとろさせてるだろ？」

「そんなこと……」

「あるよ。手首を掴んで、動くなって言ったときも、今みたいに叱ってるときも、何か期待してる表情してる」

耳元へ唇を寄せられる。

「ドMちゃんなんだ、千紗」

「ち、がうし……ドMじゃないし……」

「そうか？じゃあ、エッチなお仕置きはやめるか」

「えっ……」

そう言われると、残念に思ってしまう……。

大好きな玲央にいっぱい責められちゃうとか、想像しただけで、おまんこ濡れちゃう……。動画みたいにお尻真っ赤にされちゃうの、どのくらい痛いのかな……。本当に気持ちいいのかな……。？

でも……。玲央にドミってバレて、引かれたくないし……。

「無理に暴く趣味はないし、千紗が自分から話してくれるまで待つつもりだったんだけど、悪いことしたお仕置きにちょうどいいかなって」

甘い言葉とは裏腹に、腰を抱く腕は逃げ道を塞ぐように強い。

「千紗、エッチなお仕置きと、お菓子禁止のお仕置き、どっちがいい？」

玲央の指が、私の頬を撫でる。

「……………っ……………」

「今日の千紗には、どんなお仕置が必要か教えて。ちゃんと俺に反省してるって伝えられるお仕置き、選んでね。いい子ちゃんな千紗ならできるよな？」

私に選ばせてくるなんて、ずるい……………！

エッチなお仕置き、選びたいけど、恥ずかしくて無理だよ……………玲央から言ってくれないかな……………。

そんなことを考えて、玲央の顔を見ると、いつもの優しい眼差しをしている。

「千紗なら、どっちを選ぶべきか、選びたいか、決まってるよな？ 勇気出して、俺に教えてごらん」

玲央なら、全部受け入れてくれる、そう思った。

少し迷ったあと、唇にきゅつと力を入れて、話し出す。

「…………え…………エッチなお仕置き……………してください……………」

「ん、いい子。ちゃんと言えたな」

ポンポンと頭を撫でられる。

「千紗のお尻真っ赤に染まるくらいお尻叩くから、なにが悪かったのかちゃんと考えて、いっぱいごめんなさいしようか」

玲央の目が、ぎらりと光った気がする。

「……うん………」

じっと見つめてくる玲央。

「どうしても我慢できなくなったら俺に教えること。わかった？」

「……うん」

「うんじゃなくてはいだろ？」

「……………は、はい」

「いい子」

ポンポンと私の頭を撫でて、体勢を整える玲央。

「もっとこっちにきて」

腰をグッと玲央の方へ引き寄せられ、耳元で囁かれる。

「じゃあ、自分からお尻叩かれる体勢になって」

ぽんぽんと太ももを叩く玲央。

「お尻叩かれるエッチな動画見てる千紗ならどうすればいいかわかるだろ？」

「……………っ……………」

む、り……………！

いざ、そういう雰囲気になると、体が硬直して、思うように動けない……。

「体ガチガチになっちゃったな、緊張してる？」

「緊張っていうか……玲央にお尻叩かれるとか……………恥ずかすぎて……」

「まあ、そうだよなあ……………じゃあ、千紗が自分を曝け出せるようになるまでは俺が指示するか」

大きな手で背中を撫でられて、そのまま敏感な腰をすりすりとお撫でられる。普段は優しく触れてくれる大きな手が、今日は私を叱るために動いている。いつもと違う空気にドキドキする。

「ここにうつ伏せになって」

グツと手首を引っ張られて、玲央の太ももへうつ伏せに寝ころばされる。大きな手でお尻を撫でられ、もう叩かれるのかと体に入力を入れて構える。

「千紗、お尻叩かれるの初めて？」

「……う、うん……………」

「じゃあ、20回くらいにしとくか。叩かれたら自分で回数数えて、間違えたらやり直し。回数数えた後、ごめんなさいっていうこと、わかった？」

「……………わかった……………」

「千紗が、どんなに恥ずかしい姿晒しても嫌いになつたりしないから、安心して全部曝け出してね」

「う……………うん……………」

ポンポンとお尻を叩かれる。

「じゃあ、始めるか……………千紗はなんでお仕置きされることになっちゃったんだっけ？」

「玲央のことを信じないで……………勝手にについていったこと……………」

「それから？」

「危ない場所に1人で行っちゃったこと……………」

「そうだな。約束守れない子にはお仕置きしないとな……………お尻あげて」

スカートの上からゆっくり撫でられる。

パンつつ……………！

乾いた音が部屋に響き、スカート越しのお尻へ鋭い熱が走った。

「きゃっ……………！」

「回数数えて、ごめんなさいしないとまた1回目からになるぞ」

「い、いちっ……………ご、めんなさいっ……………」

痛いけど、全然我慢できるし、なんかこの体勢えっちで、興奮する……………。

「次2回目ね」

パンっ……………！

叩かれた場所がじわつと熱くなって、熱が蓄積されていく。

「に……いつ……………♡」

「ごめんなさいは？」

「あうっ…………ごめんっ…………なさいっ…………♡」

「余裕だね、千紗。甘い声になってる」

パンっ……………！！！！

「さっ……………んんんっ…………♡！ご、めんっ……………なさいいい…………♡！！！」

お尻を叩く力がちよつとずつ強くなってる気もするけど、気のせいかな……………。

「20回ミスなく数えられるかなー、千紗」

「で、きるっ……………」

そう答えた瞬間、パンつと、さっきより強めの力で叩かれる。

「ひうっ……………!!」

い、痛いかもっ……………♡

「数」

「あう……………よ、んっ……………よんっ……………♡」

「あとは？」

「……………ご、ごめん……………なしゃいっ……………♡」

「もう次から、ヒントあげないからな」

「うんっ……………うんっ……………」

パンっつっつっ……………♡!…!

右、左と交互に叩かれている気がする。

「ん……………ごっ……………♡……………ご、めんなさいっ……………」

「今ので5回だけど、どう？20回余裕でこなせそう？」

「い、たい……………かも……………」

「そっか、じゃあ、いいお仕置きになるな」

そう言うと、スカートを捲り始める玲央。

「ちょっ……………！」

お尻が見えないように手で隠すが、手首を掴まれて、元に戻される。

「バックだから、お尻全部見えちゃってるっ……………！」

ほんのり熱を持ち始めたお尻をゆっくり撫でられ、気持ちよくて、体の力を抜いた瞬間、パンっ……………と容赦無く叩かれる。

「やあづ……………!!!い、たいい……………♡!!!」

「布1枚無くなるだけで全然違うみたいだな」

「ふっ……………うう……………」

不意を突かれたのと、想像以上に痛かったのとで、頭の中が真っ白になってしまう。

「はあ……………んん……………痛い……………おしりい……………」

「次行くぞ」

「んっ……………」

そう言われ、次の衝撃に備えて、お尻にグッと力を入れる。

パンンっつっつ……………!!

「あうううっ……………!!」

あれ……？今何回目だっけ………？

数え忘れたことに気づき、急いで何回目なのか考えているうちに、パンっと、叩かれてしまう。

「残念だな、千紗。約束通り、最初からやり直しな」

「……………やっ……………」

露出した肌を連続で叩かれるって、こんなに痛いんだ……………。
20回なんて無理かもっ……………！

パンっ……………♡！！！！

部屋中に、乾いた音が響き渡る。

「い、ち……………ご、めんなさいっ……………♡」

「ん、いい子。せっかく6回まで頑張ったのに、残念だったな。でも、千紗はド＼ちゃんだから、数増えて興奮してるだろ」

そう指摘され、強く否定できない自分がいる。

パンっっ……………！

「あううっ……………♡！！！！にぃ……………♡」

お尻を叩かれてるこの状況に興奮するなんて、私、ド＼すぎる……………。
さっきは、5回なんて楽勝だったのにいつ……………！

「ごめっ……………なさいい……………」

叩かれると、おまんこに振動が響いてきて、痛みした後、穏やかな快楽に包まれる。
でも、痛いものは痛い。

どんどん我慢できなくなってくる。

パンっ……………！！！！

「ひぎっ……………い、たいい……………さんっ……………まださんのやっ……………！！ごめんなさいしてるのにな……………！！」

「やだっって言ってもだめ。自分でやるって決めたんだから、最後まで頑張ろうな」

パンンっっっっ……………！！

「あうっ……………！よ、ん……………ご、めん……………なさい……………」
「お尻真っ赤になってきたなあ……………お尻、もちもちでかわいい……………」

ムニムニと撫でられて、クパあ……………とアナルが見えるくらいまでお尻を広げられる。
だめっ……………おまんこ濡れてるのバレちゃうっ……………！！

隠そうと思ったが、また玲央に止められると思い、キュッとお尻に力を入れて抵抗する。

「あれ？千紗、お尻叩かれてあんなに痛がってたのに、やっぱり気持ちよくなってたんだ」
そう言って、濡れた密穴を優しく撫で始める玲央。

「んっ…………ふうっ……………♡」

気持ちいいっ……………お尻ヒリヒリして痛いのに、おまんこ気持ちいいから、わけわからなくなってくるっ……………！

「ね？千紗。なんでお尻叩かれておまんこ濡らしてんの？興奮しちゃったの？お仕置きなの」

「ち……………がっ……………」

ぶんぶんと頭を横に振って、否定する。

「千紗のおまんこは俺にちゃんと教えてくれるよ？お尻叩かれて痛いのに気持ちよくなっちゃってますって」

「……………っ……………」

そう言いながら、意地悪く、敏感なクリトリスを弄り始める玲央。

そこはだめえ……………気持ちいいのっ……………クリっ……………気持ちいいのっ……………♡！！！！

くるくると円状に撫でられるたびに、体がビクビクして、絶頂することしか考えられなくなる。

「……千紗、お仕置きのこと忘れてるだろ。俺の指におまんこ擦り付けて、イクイクしようとしてるだろ」

「ふっ……………んっ……………いくっ……………いくいくするっ……………♡」

もっと、クリいっぱいじってえ……………♡

お仕置きのことを忘れて、おねだりするも、玲央の指は私のおまんこから離れていく。

「だめだろ。お仕置き終わってないんだから。ほら、けつあげろ」